

● 東北

正木 裕 美

コロナ禍における警戒感が弱まり、ウィズ・コロナが一層進んだ2023年。公演における感染予防対策ガイドラインの廃止や社会行動における個人の判断が優先されるようになると、東北では大人数を要する大規模公演の増加、チケットの完売や客足の復調が顕著に見られるようになった。

とりわけ、仙台クラシックフェスティバル2023（9/29～10/1日 立システムズホール仙台ほか）では、800席ほどの大ホール公演ほか完売も目立ち、延べ27,900人が来場。聴衆の施設内の回遊率や滞在時間が増し、前年以上の賑わいが見られた。メインとなるホール公演は2施設6会場、68公演が行われ、ソロや室内楽、オーケストラ公演等に奏者190名が参加。牛田智大、田村響、小井土文哉（いずれもp）、シャノン・リー（vn）、横坂源（vc）、伊藤圭（cl）、トリオ・アコード、仙台フィルハーモニー管弦楽団や仙台市長の郡和子氏（語り）まで、宮城県内外の多彩な出演者が特色溢れるプログラムで魅了した。

オーケストラでは、仙台フィルが創立50周年の節目を迎え、その謝意を表すプログラムを展開している。定期公演では23年シーズンより加わった太田弦と常任指揮者・高関健ら現指揮者陣のほか、円光寺雅彦、小泉和裕、山下一史ら歴代指揮者を招聘。また作品面では前身の宮城フィルハーモニー管弦楽団以来発展に尽力した指揮者／作曲家陣、芥川也寸志の「弦楽のための三楽章」（6月）や、外山雄三の「管弦楽のためのラプソディ」（10月）を取り上げた（2024年1月には創立者の一人、片岡良和「抜頭によるコンポジション」を演奏）。併せて各々のスペシャリティに即した選曲も目を引き、高関＝マーラー：交響曲第4番（6月）、太田＝エルガー：演奏会用序曲「フロワサル」ほかイギリス作品（9月）や、ホセ・マリア・ガジャルド（g）＝自作「セビリアの侍」（11月 指揮＝ジョン・アクセルロッド）等が定期公演のプログラムで編まれた。中でも「セビリアの侍」は、仙台ゆかりの支倉常長ら慶長遣欧使節を描いたジョン・J・ヒーリーの同名小説に着想を得ており、作曲家自身のギターとともに当地で聴けたことも意義深い。

その他50周年記念として、山形交響楽団との合同公演（仙台7/22、山形23 指揮＝パスカル・ヴェロ）、創立理事長 故・藤崎三郎助氏（第6代）を称えるコンサート（9/2 指揮＝円光寺）、東日本大震災で受けた支援を機に、より絆を深めたオーケストラ・アンサンブル金沢との合同公演（12/19 指揮＝山田和樹）等、4つの特別演奏会が行われた。創立時、みずからの手弁当て歩んだ地方オーケストラの50周年は、それを支えた指揮者陣、地元、周囲の支援あってこそ――半世紀の歩みを紡ぎ、その謝意を示した形だ。

一方、2022年シーズンに創立半世紀を迎えた山形交響楽団は、常任指揮者 阪哲朗とのオペラへの取り組みが耳目を集めている。やまぎん県民ホールでは22年末から両者の演奏でオペラフェスティバルを開催しており、その第2弾、第3弾としてモーツァルト「フィガロの結婚」（1/28 演出＝宮本亜門）とブッチーニ「ラ・ボエム」（2/26 演奏会形式）上演。また23年末には同ホールとびわ湖ホール、東京芸術劇場による全国共同制作オペラ、ヨハン・シュトラウス二世のオペレッタ「こうもり」も話題となった（12/17 台本・演出＝野村萬斎）。殊に「こうもり」は阪＆山響の伸縮自在な音楽に、桂米團治（フロッシュ）の軽妙な節回し、田崎尚美（ロザリンデ）の貫禄を湛えた芸達者ぶり、藤木大地（オルロフスキー公爵）の怪演が映える凄演。山形弁や当地の名産品も劇中に登

場し、聴衆の熱い喝采を浴びた。これらの公演は山形市民のみならず広く聴衆を集めており、東北のオペラ文化を支えている。

また2021年まで同響の首席客演指揮者を務めたラデク・パボラークが23年からミュージック・パートナーに就き、その就任記念を兼ねた6月定期も忘れ難い（6/17、18 山形テルサホール）。同郷の作曲家ロゼッティのホルン協奏曲では自らソリストも務め、知られざる超絶技巧の難曲を披露した。

室内楽では、仙台フィルの三宅進（音楽監修）と助川龍、西沢澄博（プランナー）によるシリーズ「Music from PaToNa」（仙台市宮城野区文化センター PaToNaホール）が10年目を迎えている。Vol.36「おいもとめる」（7/28 vn＝伊藤亮太郎／Cb＝助川龍ほか）ではメンデルスゾーンの弦楽八重奏曲等が、またVol.37「きわめる」（11/1 vn＝フェデリコ・アゴ스티ーニ／vla＝川本嘉子ほか）ではモーツァルトのヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲等がプログラムに組まれた。名曲を極め、知見を深めるプログラミングと質の高い出演者陣が、室内楽の魅力を広める一助となっている。また仙台銀行ホールイズミティ21におけるシリーズ「イズミノト」がホーム会場の改修のため、日立システムズホール仙台シアターホールで一回のみ開催された（3/5）。「リヒャルト・シュトラウス 変容ノ前夜」をテーマに、集った奏者はコーディネーターの吉岡知広（vc）、関朋岳、川又明日香（以上vn）、村松龍（vla）、北端祥人（p）ほか。気鋭の若手の積極的な起用、チラシやプログラムを埋めつくす解説なども音楽ファンの興味を引いており、ホール改修後の再開が期待される。

リサイタルでは、第8回仙台国際音楽コンクール各部門の第1位 ルウオ・ジャチン（p）、中野りな（vn）がそれぞれ日立システムズホール仙台で凱旋公演を開催。前者はスクリャーベのソナタ第7番「白ミサ」や技巧に溢れたシュルツ＝エヴラー「ヨハン・シュトラウスの『美しき青きドナウ』によるアラバスク」ほかを（5/28）、また後者はモーツァルト、R・シュトラウスの各ソナタやイザイの無伴奏ソナタ第5番ほかを披露し（6/18）、コンクール以降の進境を聴かせた。

また同コンクール関連では、ルウオ・ジャチンが仙台フィルとサン＝サーンスの協奏曲第2番で協演したほか（6/16、17）、ホン・ソラン（第8回 vn部門第4位）が宮城教育大学交響楽団（8/6）と、ジョンファン・キム（同p部門第4位）が仙台ニューフィルハーモニーと（11/3）それぞれ協演している。コンクール開催後も、演奏機会の創出、また市民との音楽的交流など、開催地ならではの企画が続く。

終わりに、創造的な取り組みとして2公演を挙げたい。1つ目は仙台フィル・オーボエ首席奏者 西沢澄博のリサイタル（3/23 PaToNaホール）。西沢はブーランクの作品等とともに、地元作曲家への委嘱作品、小山和彦：オーボエ、ファゴットとピアノのためのトリオバルティータと吉川和夫：オーボエとピアノのためのソナタ「南十字第三時」を初演した。本件や前述の室内楽シリーズにおけるプランニング等が讃えられ、西沢は令和5年度宮城県芸術選奨を受賞している。また多賀城市では多賀城の創建1300年を記念し、能楽「海士」をもとに翻案された多賀城版の能／オペラ「海士AMA」が上演された（12/3 多賀城市文化センター／作・演出＝志賀野柱一／音楽監修＝高塚美奈子）。能楽（観世流能楽師 津村禮次郎、舞踊（小林由佳）、歌（S＝オクサーナス・ステパニウック）、多賀城近郊を映した映像など、異なる分野が交錯しつつも親しみのある要素が親近感を醸成し、地元ならではの上演が実現した。

このほか仙台ではサロンの雰囲気も湛えた小規模ホールやティールンによる独自のリサイタル・シリーズなども進行している。規模の大小を問わず再び活性化する現状を付記しつつ、本稿の結びとしたい。